

0-0722

他者の感情理解に自己の表情が影響する ～共感的コミュニケーションの性差の観点から～

松尾 篤¹⁾, 吉川 歩実²⁾, 森岡 周¹⁾¹⁾畿央大学ニューロリハビリテーション研究センター, ²⁾生長会府中病院

key words 共感・コミュニケーション・感情

【はじめに】医療者と患者間のコミュニケーションの成功は、最良の理学療法を提供する上で重要な要素であることは言うまでもない。また、チーム医療の実践においても患者やスタッフ間での有機的なコミュニケーションは欠かすことができない。コミュニケーションにおける非言語的要素の例としては表情が挙げられ、臨床場面においても患者の表情から感情を読み取り、他者の心的状態を理解しようとする行為とともに理学療法が実践されている(Roberts L, 2007)。しかしこれまでの研究では、他者の表情から感情理解を行う際の自身の表情について十分に議論されていない。対人コミュニケーションという双方向性の社会的行動という観点から考えると、表情を読み取る側の表情変化にも注目すべきであると考えられる。また、他者の感情理解の性差に関する報告は存在するが、一定の見解は得られていない。そこで本研究では、理学療法における情意領域の教育にとっても重要な他者の感情を理解する際の自己の表情変化の影響と性差を検討し、また他者意識の高さと感情理解の関係を検証することを目的とする。

【方法】研究参加者は健常大学生 99 名(男性 45 名, 女性 54 名, 平均年齢 21.08±1.1 歳)とし、全参加者がアジア版 Reading the Mind in the Eyes Test(野村・吉川:2008, 以下, RMET)を実施した。RMET では、ノート型 PC 画面上に男女様々な目の写真を 2 秒間提示し、その後画面上に目の写真が表す感情を含んだ 4 種類のテキストが提示された。参加者は、可能な限り速く、写真が表す感情を示す正解テキストに対応したボタンを押すことで回答した。練習セッションを 10 画像実施し、その後 36 画像の実験セッションを行った。RMET の実施条件として、参加者を以下の 3 群に割り付けた。模倣群では、提示された目の画像を自身で模倣するよう指示し、模倣しながら RMET を実施した。バック群では、参加者の顔にフェイスバックを設置し、表情を固定した状態で RMET を実施した。コントロール群では、特に事前処置、口答指示を与えずに RMET を実施した。表情筋の活動を捉えるため、筋電図にて皺眉筋の活動をモニターした。アウトカムは、RMET 正答率、他者に対する内的・外的意識を質問紙で回答する他者意識尺度とした。統計分析は、RMET 正答率の群間・男女比較に Mann Whitney test, Kruskal-Wallis test を使用し、RMET 正答率と他者意識尺度の関係性には Spearman の順位相関係数を使用して分析を実施した。

【結果】RMET 正答率の群間比較において、男性では模倣群がバック群と比較して有意に高い正答率($P<0.05$)であったが、女性では 3 群間に有意な差を認めなかった。RMET 正答率の男女比較では、男性に比べて女性の正答率が有意に高く($P<0.05$)、また女性は提示画像の性差に関わらず同様の正答率であるのに対して、男性では女性画像提示時よりも男性画像提示時の RMET 正答率が有意に高かった($P<0.05$)。RMET 正答率と他者意識尺度の相関分析では、男性においてのみ有意な正の相関関係を認めた($r=0.3$, $P<0.05$)。

【考察】女性は男性よりも他者の感情理解に優れており、男性においてのみ他者の表情を模倣することによって感情理解が促進された。これには脳の機能的性差と性役割や環境要因が関係していると考えられる。女性では、共感に関与する言語関連領域が男性よりも広範囲に存在しており、また子育てなどの共同体中心的な性役割を有していることから他者理解に優れていると考えられる。一方、男性では狩猟採集民としての男性社会での競争、権力、社会的地位などの性意識や環境要因が強く、他者との共存、あるいは他者、特に女性を理解することに困難を経験すると言われている(Schiffer B, 2013)。しかしながら、他者の表情を模倣することで、他者理解が促進されることから、模倣による脳内の言語関連領域や共感システムの活性化が関与していることが示唆される。理学療法教育の現状では情意面に対する具体的な教育実践が不十分である。今後は、言語・非言語情報を含めた医療コミュニケーションを主軸とした、医療者として患者を理解するという共感的行動を育むような実践的教育が必要であると考えられる。

【理学療法学研究としての意義】本研究は、他者の感情理解と自己の表情表出の関係性および性差を扱った研究である。理学療法学との関連性は、医療コミュニケーションは理学療法の根幹に位置する重要な要素であり、チーム医療の推進にとっても大切な要因である。本研究の結果が、理学療法の成果を支える対人行動時の共感メカニズム解明の一助を果たした意義は大きいと考える。